

《巻頭言》リトミックはモラルをはぐくんでいるだろうか

神原 雅之

ハーバート・リード（1893-1968）は、イギリスの有名な芸術評論家です。彼は著書の中で次のように述べています。「教育の真の目的は、モラル上の過程にある真の目的と同じように、幸福を生み出すことである」（『芸術教育による人間回復』明治図書）と。モラルとは、個性の伸長と社会適合という人間形成の有機的な統一性と調和を指しており、一人の善良な市民となるために欠かせないもの、と述べています。そういえば最近では、ブータン国王が来日され、幸福は一人ひとりの心の中にあると話され、多くの人々に共感を与えたのは記憶に新しいところです。

さて、現代の教育は、モラルや幸福感を生み出しているのでしょうか。ここで少し考えてみたいと思います。教育は、いつの時代も社会のさまざまな事象と無縁ではありません。特に、現代は利便性と合理性が強調されており、省エネ、環境、福祉、安全などに人の関心が向いています。ICTの技術は日々進化し、私たちの生活を大きく変貌させています（エコやスマート家電の普及で私たちは多くの恩恵を授かっています）。その一方で、人とのかかわりを避ける傾向や、他者の存在を軽視する自己中心的な人が増えています。ストレスなどから精神的病理を抱えている人も増えています。こうした兆候は、前述のリードが言うところの「モラル」の低下と言い換えることができるでしょう。

私たちは、モラルを維持するために、その習慣（モラル）を法律や規則として制度化するのですがそれがひとたび文字化されると、私たちはその制度に従うことになります。ここで生じる従属意識は苦痛ともなります。これは人間が本来的にもっている自由で創造的な生き方（モラル）とは矛盾するものです。リードによれば、（モラルは）自らの意思によって、とりわけ自らの美的な基準に基づいて、自らを命令し、自ら行動することが重要だと考えたのです。そこでは、意思と必然性、感性と論理の調和が鍵になるとも述べています。

形骸化した公式を教えるような教育では、人のモラルは育たないと言えます。このあたりには、ジャック＝ダルクローズの思想と重なり合うところがあるように思われます。自らの美的感性と判断によって、自らの行動を解放・制御する創造的な営みを通じて、美的感情を他者と交わすとき、その喜びは倍加していきます。これはモラルあるコミュニティの空間となります。音楽アンサンブルが日常的な行為として交わされるとき、モラルは常に新鮮さを保ち続けるのだと考えられるのです。

さまざまな芸術文化（音楽、美術、文学、建築、など）は、私たちの生活を彩っています。芸術はいまを生きる私たちの心の豊かさを照らし出す存在でもあります。モラル（美的な基準）は、音楽を聴く人の心の中にあるのです。この観点から、リトミックは、一人ひとりの「意思」と「美的感性」をはぐくむことが殊更に重要になると考えられます。

（かんばら まさゆき／国立音楽大学）